

専攻名	両専攻共通	必修・選択	選択	単位	2	学期	3Q
科目群	産業技術研究科科目群	科目名 (英文表記)	国際開発特論 International Development Studies		教員名	前田 充浩	

概要	<p>開発援助（経済協力、国際開発）とは、先進国（一人当たり GNI が概ね 14,000 ドル以上）が発展途上国（一人当たり GNI がそれ以下）に対して行う、各種の経済成長支援のことである。本講義では、これについて、大きく 2 つの内容を講義する。1 回の受講で 2 つの内容を学べるところが嬉しいところである（一粒で 2 度。．．）。</p> <p>第 1 の内容は、通常の、オーセンティックな開発援助論である。第 2 次世界大戦以降現在の SDGs（Sustainable Development Goals）に至るの世界の開発援助の歴史、1950 年代に開始し 1990 年代には世界最大の ODA（Official Development Assistance：政府開発援助）供与国を経験した日本の開発援助の歴史、オーセンティックな開発援助論の理論的裏付けとなる新古典派成長会計（開発経済学）等を講義する。将来開発援助関係の仕事（政府関係機関、国際機関、MDBs（Multilateral Development Banks：多国籍開発金融機関、NPO 等）を目指す学生に、必須の知識と能力を付与するものである。</p> <p>第 2 の内容は、AIIT グローバル・コースならではの、事実上他では聴けない内容である。すなわち、開発援助を全く新たなビジネス機会と捉え、世界のライバルに先んじてその機会をものにするための知識と能力である。世界の多くの人々が、開発援助を「貧しい発展途上国の人々を救うという正義」として捉え、そこにビジネスを持ち込むことを躊躇している。しかしながら、講義で明らかにのように、突き詰めれば開発援助の実態は（先進国から発展途上国に対する）「カネの流れ」である。「カネの流れ」あるところにビジネスあり、ビジネスあるところに「カネの流れ」あり。受講者には、開発援助を「カネの流れ」として捉える能力を徹底的に身に着けていただく。この能力を身に着けた人間は、今日の世界では極めて少数であり、したがって、ライバルは少なく、圧倒的に有利な立場を享受できる。</p> <p>付言すると、第 2 の内容、すなわち開発援助を「カネの流れ」として捉えてそこにビジネス機会を見出していく姿勢は、今日においては、第 1 の内容の立場、すなわち正統派の開発援助論においても邪（よこしま）なものではない。20 世紀中とは異なり、殆ど全ての発展途上国が順調に産業化、経済成長を進めている 21 世紀においては、適切なビジネスの展開は経済成長のための基幹的なエンジンであり、そのことは MDBs（Millennium Development Goals：対象は 2000～2015 年）の後を継いだ SDGs（対象は 2016～2030 年）においても明確に謳われている。また、講義で説明する PPP（Public Private Partnership：官民協調）、BOP（Base of the Pyramid）ビジネス等は、そのことを表す概念である。</p>																														
目的・狙い	<p>この講義は、学習者が、今日の発展途上国の発展問題についての理解を深め、開発援助の手法についての実務的な能力を身に付け、さらには具体的な開発援助プロジェクトを企画立案できる能力を獲得することを目的とする。具体的には、学習者はこの授業を通じて以下の知識や・能力を習得できる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.開発援助の基礎的概念と、新古典派経済成長理論に基づく通常の開発経済学上の基礎を理解する（第 1 の内容）。 2.国際関係論等新たな視点に基づく開発援助の捉え方を理解するとともに、開発援助のファイナンス面についての実務的知識を獲得し、開発援助を「カネの流れ」として理解し、ビジネス機会を捉える能力を獲得する（第 2 の内容）。 3.具体的な開発援助プロジェクトに関する実務的な企画立案能力を獲得する。 																														
前提知識（履修条件）	<p>発展途上国の開発問題、開発援助に関心を有すること。平たく言えば、世界全体をより望ましい状態にするために、たとえ微力であっても何かしらの貢献をすることに使命感を感じること。特に、発展途上国の現状に強い関心を持ち、「何かをしたい。」という気持ちを持つこと。</p> <p>その「何かをしたい。」という気持ちは、起業等ビジネスの展開であっても全く構わない。発展途上国におけるビジネスの成功は、直截に発展途上国の経済成長に繋がるのである。</p>																														
到達目標	<p>上位到達目標</p> <p>開発援助の基礎概念の理解の上に、最先端の手法を用いて今日的な課題に対応できる開発援助プロジェクトを企画立案することができるようになる。</p> <p>（第 1 の内容の場合）開発援助関連の機関（国際機関、NPO、政府等）における政策提案（アドボカシー）ができるようになる。</p> <p>（第 2 の内容の場合）ODA を用いた開発援助案件と連携して、適切なビジネスの企画、実施ができるようになる。</p> <p>最低到達目標</p> <p>開発援助の基礎概念について理解し、従来型の開発経済学の枠組みで自らの関心ターゲットに対する開発援助プロジェクトを企画立案することができるようになる。</p> <p>（第 1 の内容の場合）開発援助関連の機関（国際機関、NPO、政府等）における政策立案の補佐ができるようになる。</p> <p>（第 2 の内容の場合）ODA を用いた開発援助案件と連携したビジネスの補佐ができるようになる。</p>																														
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>形態</th> <th>実施</th> <th>特徴・留意点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>録画・対面混合授業</td> <td>○</td> <td>授業欠席者については、次回、録画視聴を確認する（録画分の内容に関する口頭質問を行う。）。なお、本授業では議論が「命」となっているので、できるだけ出席することが望ましい。</td> </tr> <tr> <td>対面授業</td> <td>講義（双方向）</td> <td>○</td> <td>本授業のモットーは、「脳に汗をかく」である。議論に重点を置くので、頭をフル回転させ、議論に参加することが求められる。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>実習・演習（個人）</td> <td>○</td> <td>演習を通じて具体的な開発援助の企画案を作成し、発表する。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>実習・演習（グループ）</td> <td>—</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>サテライト開講授業</td> <td>—</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>その他</td> <td>—</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>						形態	実施	特徴・留意点	録画・対面混合授業	○	授業欠席者については、次回、録画視聴を確認する（録画分の内容に関する口頭質問を行う。）。なお、本授業では議論が「命」となっているので、できるだけ出席することが望ましい。	対面授業	講義（双方向）	○	本授業のモットーは、「脳に汗をかく」である。議論に重点を置くので、頭をフル回転させ、議論に参加することが求められる。		実習・演習（個人）	○	演習を通じて具体的な開発援助の企画案を作成し、発表する。		実習・演習（グループ）	—			サテライト開講授業	—			その他	—
形態	実施	特徴・留意点																													
録画・対面混合授業	○	授業欠席者については、次回、録画視聴を確認する（録画分の内容に関する口頭質問を行う。）。なお、本授業では議論が「命」となっているので、できるだけ出席することが望ましい。																													
対面授業	講義（双方向）	○	本授業のモットーは、「脳に汗をかく」である。議論に重点を置くので、頭をフル回転させ、議論に参加することが求められる。																												
	実習・演習（個人）	○	演習を通じて具体的な開発援助の企画案を作成し、発表する。																												
	実習・演習（グループ）	—																													
	サテライト開講授業	—																													
	その他	—																													
授業外の学習	<p>毎回、次回の授業に関連する課題を指示するので、事前に考えを整理し、次回授業で発表すること。</p>																														
授業の内容	<p>開発援助（経済協力、国際開発）を通じた発展途上国の発展への貢献を行なうための実務能力の習得を、講義と演習の組み合わせによって実施する。</p> <p>内容の第 1 の柱は、開発援助の基礎概念、開発援助政策史、新古典派経済成長理論等の講義を行なう（一般的な開発援助論の講義と共に共通する内容である）。</p> <p>第 2 の柱は、国際関係論の視点等にも立脚し、開発援助を「カネの流れ」として捉える視座を獲得し、それに基づくビジネス機会に関する内容の講義を行なう（AIIT 国際コース独自の内容である）。</p> <p>第 3 の柱は、演習で、学習者が具体的な開発援助プロジェクトの企画案を策定し、指導を得る。</p>																														
授業の計画	回数	内容				サテライト開講	対面/録画																								
	第 1 回	<p>【基礎的な概念】</p> <p>開発援助（Developmental Assistance）（または経済協力（Economic Cooperation））の概念を理解する。その前提として、発展途上国という概念、発展途上国 v.s. 先進国、という図式で捉える世界システムの構造を理解する。キーコンセプトは「一人当たり GNI」である。</p>				—	録画																								
	第 2 回	<p>【ODA（政府開発援助）】</p> <p>ODA の概念を理解し、OECD（経済協力開発機構）、世界銀行等で定式化された開発援助の仕組みを理解する。キーコンセプト</p>				—	録画																								

		ブトは「譲許性 (concessionality)」である。		
第 3 回		世界の開発援助政策史 I（1940 年代～1960 年代） 世界の開発援助政策の歴史について、東西冷戦の枠組みで（国際関係論の視点で）俯瞰する。具体的には、「南北問題」という概念の誕生、OECD の設立と ODA の概念の確定、開発援助に関する東西両陣営の競争である。キーコンセプトは、開発援助を用いた東西両陣営による発展途上国争奪戦、である。	—	録画
第 4 回		世界の開発援助政策史 II（1960 年代末～東西冷戦終結（1989 年）） 世界の開発援助政策の歴史について、引き続き国際関係論の視点で俯瞰する。「西側」陣営は、1960 年代末に ODA の概念を整理し、新古典派開発経済学を開始するとともに、1970 年代を第 1 次、1980 年代を第 2 次国連開発の 10 年とし、ODA の増強に努めた。その経緯と国際政治上の背景を理解する。	—	録画
第 5 回		世界の開発援助政策史 III（1990 年代） 東西冷戦終結後の 1990 年代、世界銀行／アメリカのイニシアティブにより、世界の開発援助の潮流は、貧困削減、社会セクター重視へと大きく舵を切り、2000 年の国連ミレニアム開発目標に至る。その経緯と国際政治上の背景を理解する。キーコンセプトは MDGs (Millennium Development Goals) 及び「ワシントン・コンセンサス」である。	—	対面
第 6 回		世界の開発援助政策史 IV（21 世紀） 21 世紀、地球は、ほぼ全域が順調な経済成長を進める、という未曾有の事態を迎えるに至った。この状況下では、「豊かで優秀な先進国」 v.s. 「貧しくて××な発展途上国」という図式は事実上意味をなさなくなる。開発援助のあり方も当然大変更を余儀なくされ、2015 年 SDGs (Sustainable Development Goals) に至る。その経緯と国際政治上の背景を理解する。	—	録画
第 7 回		日本の開発援助政策史 I（基本的なモデル） 1950 年代に開始された日本の開発援助は、国際的に見て、極めてユニークなモダリティとなっている。その基本的な構造を、経済産業省が 2005 年にまとめた「ジャパン ODA モデル」の概念に基づき理解する。キーコンセプトは、「貿易・投資・開発援助の三位一体」である。	—	録画
第 8 回		日本の開発援助政策史 II（歴史） 「ジャパン ODA モデル」の概念に基づき、1950 年代以降の日本の開発援助政策の歴史を俯瞰する。1980 年代前半まで、日本は、特に東アジア各国に対して、三位一体型の円借款をタイド条件で大量に供与していく。1987 年に日本政府は、開発援助政策の基本思想を「国際協調路線」に変更し、以降 1996 年までグローバル・アントラード化を推進した。また 1990 年代を通じて日本は世界最大の ODA 供与国であった。一方、1997 年以降は再びタイド化路線に切り替え、今日に至る。21 世紀においては、開発援助大綱において、明確に「日本の国益」を謳うようになる。この間の経緯と背景を理解する。	—	録画
第 9 回		新古典派経済成長理論 I 新古典派経済成長理論の基礎を理解する。具体的には、成長会計、ハロッド＝ドーマー・モデル、ソロー＝スワン・モデル、内生的経済成長理論等である。	—	録画
第 10 回		新古典派経済成長理論 II 新古典派経済成長理論の近年の成果の概要を俯瞰する。具体的には、累積債務問題、貿易・直接投資、不平等改善、制度・ガバナンスである。	—	録画
第 11 回		金融地政学 I 主として世界システム論に立脚し、開発金融（ODA+輸出信用）による大国間の勢力圏争奪戦について分析する金融地政学を学ぶ。金融地政学の基本的なモデル（近代グローバリゼーション、「中心一新興国一周辺」の世界システム、「軍縮」の国際レジーム、「新興国封じ込め」の国際レジーム等）を学ぶ。	—	録画
第 12 回		金融地政学 II 金融地政学のモデルに基づき、1919 年以降の開発金融を巡る世界の動きを俯瞰する。1920～1960 年代におけるヨーロッパ主要国間の争い、1950～1980 年代の東西冷戦、1960 年代～1978 年のヨーロッパ主要国対米国の争い、1980 年代前半の米国対フランスの争い、1985～1987 年の新興国日本の封じ込め、1990 年代～2007 年の OECD 諸国対ブラジルの争い、1990 年代以降の OECD 諸国対中国の争い等である。	—	録画
第 13 回		演習：開発援助プロジェクト企画案発表及び内部検討 I 学習者が、特定の国カテゴリー、特定のセクターを選択し、これまでの講義で示された開発援助（開発ファイナンス）の手法を用いて策定する開発援助プロジェクトの企画案の「概要」の発表を行い、それに対してコメント、指導を得る。	—	対面
第 14 回		演習：開発援助プロジェクト企画案発表及び内部検討 II 学習者が、特定の国カテゴリー、特定のセクターを選択し、これまでの講義で示された開発援助（開発ファイナンス）の手法を用いて策定する開発援助プロジェクトの企画案の「概要」の発表を行い、それに対してコメント、指導を得る。	—	対面
第 15 回		演習：開発援助プロジェクト企画案最終発表 学習者が、内部検討の結果を踏まえてアップグレードした開発援助プロジェクト企画案を発表する。	—	対面
試験		筆記試験を行う。	—	対面
成績評価		最終試験 50%、開発援助プロジェクト企画案の発表 50%		
教科書・教材		前田充浩『国益奪還』、アスキー新書、2007 前田充浩『金融植民地を奪取せよ』、ブレジデント社、2010 白井早百合『マクロ開発経済学』、有斐閣、2005 村上泰亮『反古典の政治経済学・下巻』、中央公論新社、1992		
参考図書		"アントニオ・ネグリ・マイケル・ハート『帝国』水嶋一憲他訳、以文社、2003 William Easterly "The White Man's Burden" The Penguin Press、2006		